



日本での留学生活：見て、感じて、考えたこと

米山奨学生 王 妍さん

1. はじめに

ロータリー米山奨学生として過ごしたこの1年間は、私にとってかけがえのない、あつという間の時間でした。間もなく卒業という大切な節目を迎え、改めて自己紹介をさせていただきますとともに、日本での留学生活を通して私が「見て、感じて、考えたこと」についてご報告申し上げます。本日のスピーチが、日中文化交流の「小さな架け橋」としての第一歩となれば幸いです。

2. 見て — 日本で経験した「驚き」と「発見」

(1) 社会の優しさとインフラの充実

日本に来てまず感銘を受けたのは、街中のバリアフリー設備や障がい者支援のきめ細やかさです。視覚障がいの方や車椅子の方が一人で外出されている姿をよく目にしますが、それは日本が誰にとっても安心・安全なインフラを整えている証左です。先進国としての「真の豊かさ」を肌で実感いたしました。

(2) 「食」を通じた文化の差異

故郷・天津には存在しない「天津飯」や、中国では主食である餃子をライスと食べる「餃子定食」など、食文化のギャップに大きな衝撃を受けました。また、水餃子が主流の中国に対し、日本では焼き餃子が一般的である点も興味深い発見でした。日本でお正月に食べるお雑煮が地域によって異なるように、広大な中国各地の習俗もまた、非常に多様性に満ちているのです。

(3) 言語の壁と寛容な人間関係

日本語の未熟さゆえ、数多くの失敗も経験しました。「浅草寺(せんそうじ)」を「ソーセージ」、「ミャンマー」を「メンマ」、「割り箸」を「割引」、「クッキー」を「空気(くうき)」と言い間違えるなど、当時は冷や汗をかくほど恥ずかしい思いをしましたが、今ではどれも愛おしい思い出です。その度に周囲の方々笑顔で寛容に受け入れてくださり、異国の地で人の温かさを深く感じました。

(4) 「初めて」の連続と、広がる世界

日本語が上達するにつれて、私の世界は加速度的に広がっていきました。大学院での研究以外にも、花火大会や着物の着付け、日本語スピーチコンテスト、そして大阪への聖地巡礼など、数えきれないほどの「初めて」を経験しました。さらに日本での運転免許取得にも挑戦し、文化や習慣の違いを乗り越えて新しい世界を切り拓く喜びを味わうことができました。

3. 感じて — 「フィルター」の向こう側にある真実

(1) 「中国の大阪」 — 天津の風土

私の故郷である天津は、歴史ある港町です。かつて租界地であったことから、今でも街の中心部には欧州各国の異国情緒あふれる建築物が大切に保存されています。また、河川が多いため橋も非常に多く、世界で唯一、橋の上に建てられた観覧車「天津の目」は街のシンボルとなっています。さらに、天津の人々は非常に楽天的でユーモアに溢れており、その独特な風土人情は近年、SNSを通じて大きな注目を集めています。

(2) メディアリテラシーと情報の真実性

本日のスピーチの冒頭で、私はあえて「春節の習慣(餃子と湯円)」に関する嘘を交えてお話ししました。この小さな実験を通じ、情報の受け取り方についての考察を深めたいと考えたからです。情報が溢れる現代社会において、「耳にする情報が、必ずしも真実とは限らない」という事実は極めて重要です。特定の情報を切り貼りし、ステレオタイプを助長するメディアの「悪癖」は世界共通の課題です。

4. 考えたこと — 社会学が教えてくれた視点

(1) エコーチェンバー現象と情報の多様性

社会学には「エコーチェンバー」という言葉があります。アルゴリズムによって、自分の関心がある情報ばかりが届けられることで、いつの間にか「自分が見ている世界がすべてだ」と思い込んでしまう現象です。社会学は私に、「どんな社会現象も多様な角度から読み解くことができる。」

(2) 留学の原点 — 東京大学入学式での祝辞

私が日本留学を決意した大きなきっかけは、東京大学の入学式で述べられた上野千鶴子氏の祝辞でした。「新しい価値は異文化が摩擦するところに生まれる。未知を求め、よその世界に飛び出してほしい」という言葉に背中を押され、私は日本にやってきました。異文化との「摩擦」を恐れずに向き合ってきた経験こそが、私の成長の源泉であると強く実感しています。

(3) 異文化交流の「架け橋」としての役割

間もなく修了を迎え、今後は日本での就職を控えています。観察や交流が終わるわけではありません。むしろ、これからが本番です。異文化の交差点に立つ一人の人間として、互いの誤解を解き、友好を深める存在になりたいと考えています。

5. 結びに代えて — 2025年大阪・関西万博のメッセージより

この春から、私は日本社会の一員として新たな挑戦を始めます。日本で学んだ「多様性への深い理解」と、異文化との摩擦を恐れずに「困難に立ち向かう知恵」を糧に、社会に新たな価値を還元できる人材を目指してまいる所存です。

最後に、私が心から感銘を受けた2025年大阪・関西万博のメッセージを引用し、本報告の締めくくりとさせていただきます。

「海の向こうにはいろんな文化や価値観があるんだな、とか。当たり前って当たり前じゃないんだ、とか。人間って世界って、まだまだ伸びしろばかりだ、とか。……きのうまではなかった気持ちが、あなたのなかで確かに生まれているとしたら。きょうの朝は、あしたの朝は、まったく違う方向に進んでいける。きっと、絶対に。朝がきました。」

「おはよう、あなたの未来」 — この言葉を胸に、私はこれからも日中両国、そして世界の「架け橋」として、一歩ずつ歩み続けてまいります。

